

平成22年度森林総合研究所

九州地域

研究発表会

— 暖温帯・亜熱帯の森林における 生物多様性の維持 —

13:30 あいさつ

九州支所長 中村 松三

ジーンバンク事業紹介

13:40 林木遺伝資源の保全に向けた取組

九州育種場 遺伝資源管理課 収集管理係長 柏木 学

研究発表

14:00 亜熱帯の森の生物多様性保全に向けて

～飛べない鳥と地面をつつくキツツキの暮らす島～

九州支所 森林動物研究グループ 主任研究員 小高信彦

14:30 台風攪乱から見た照葉樹林の多様性の意義

～綾照葉樹林での調査結果から～

森林総合研究所 森林植生研究領域チーム長(更新管理担当) 佐藤 保

— 休憩 (15:00~15:20) —

15:20 人は生物多様性を守れるのか? ～阿蘇と小笠原を例に～

九州支所 森林生態系研究グループ 主任研究員 安部哲人

16:00 総合討論

16:30 閉会

九州育種場長

九州支所 育種調整監 福嶋雅喜

開催日時 平成22年11月15日(月) 入場無料
事前予約不要
13:30~16:30 ●受付/12:45~

場所 くまもと県民交流館パレア
熊本市手取本町8-9 鶴屋東館10階/パレアホール

交通案内 ★バス/水道町または通町筋下車→徒歩3分
★市電/水道町電停下車→徒歩1分

■問い合わせ先/独立行政法人 森林総合研究所 九州支所
熊本市黒髪4-11-16 TEL 096 (343) 3169



※お車の方は周辺の有料駐車場をご利用ください。



研究発表会の開催にあたって

独立行政法人 森林総合研究所

九州支所長 中村 松三

私たちは森林から様々な恵みを受けています。この森林の恵みを生態系サービスと呼び、大きく、生物の生存のための「基盤」、暮らしを豊かにする材料・物質の「生産・供給」、命の水を涵養し災害を防ぎ安全で暮らしやすい環境を「調整」、精神的な充足感などの「文化」の4つの機能が知られています。この生態系サービスは森林の生物多様性に支えられており、生物多様性が豊かになるほど生態系サービスも豊かになり、かけがえのない地球を後世に引き継ぐことができます。生物多様性を保全するための取り組みが国際的にも検討されるようになり、その一環としてこの10月には名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催されたところです。

森林総合研究所でも、生物多様性を様々な観点から評価し保全することに強い関心を持っており、森林生物と共存するエコシステムマネジメントの実現に向けて研究開発を進めています。今回の研究発表会では、九州・南西諸島における生物多様性の維持に焦点を当て、最近の研究成果を紹介いたします。本研究発表会が森林・林業への理解を一層深める契機になれば幸いです。

林木遺伝資源保全に向けた取り組み

九州育種場 遺伝資源管理課 収集管理係長 柏木 学

森林総合研究所林木育種センターでは、林木遺伝資源の保全と利用に資するため「林木のジーンバンク事業」を実施しています。

この事業では、絶滅に瀕している樹種等の希少・貴重な林木遺伝資源の保全を図るとともに、林木の新品種の開発に不可欠な育種素材として利用価値の高い林木遺伝資源等を確保するため、その収集・保存を進めつつ、これらの資源の有効活用を図るため、特性評価、情報管理及び試験研究用として配布をしています。また、地元で大切に管理・保護されてきた貴重な天然記念物等の樹木が何らかの原因で衰退してきた場合等には、所有者等の要請により親木と遺伝的に全く同じ遺伝子を受け継いだ後継クローン苗木を増殖するサービス「林木遺伝子銀行110番」や生息域外での保存管理技術の開発も行っています。今回、この事業を中心に紹介をさせていただきます。

亜熱帯の森の生物多様性保全に向けて ～飛べない鳥と地面をつつくキツツキの暮らす島～

九州支所 森林動物研究グループ 主任研究員 小高信彦

沖縄島の北部に広がる亜熱帯照葉樹林「やんばるの森」には、日本で唯一の飛べない野生の鳥であるヤンバルクイナや、世界で最も希少なキツツキの一つであるノグチゲラが暮らしています。沖縄島には従来、肉食の哺乳動物が生息していなかったため、やんばるの森に暮らす鳥たちは、地上生活に適応した独自の進化を遂げてきました。しかし、今からちょうど 100年前、ハブ対策などのためにこの島に持ち込まれたマングースが、近年、希少な動物たちの生息地に分布を広げ、大きな問題となっています。本講演では、やんばるの森の生物多様性保全に向けて、今後、必要な取り組みについて考えていきたいと思います。



台風攪乱から見た照葉樹林の多様性の意義 ～綾照葉樹林での調査結果から～

森林総合研究所 森林植生研究領域チーム長(更新管理担当) 佐藤 保

西日本を中心に分布する照葉樹林は、カシやシイを中心とした常緑広葉樹の林です。現存する照葉樹林の自然林は国土のわずか 1.6%ほどであり、保全策の必要性が指摘されています。照葉樹林の保全策を考えるには森林動態調査で得られる知見が必要不可欠です。私たちは、宮崎県綾町の国有林内に 4haの長期大面積試験地を設定し、約20年にわたって観測を続けてきました。その結果、複雑な階層構造と豊かな種組成によって台風による被害が低く抑えられていることが判ってきました。一方、人が長く利用してきた照葉樹二次林では種組成がより単純化し、台風被害を受けやすくなっていました。森林から得られる種々の恩恵（木材供給、炭素固定、レクリエーション等の機能）を受けるには、種の豊富さ（高い多様性）だけではなく、二次林や針葉樹人工林を交えた多様な森林の配置を考えることも重要です。本発表では、九州地区での具体的な調査結果を通じて、照葉樹林の多様性の意義を紹介します。



人は生物多様性を守れるのか？ ～阿蘇と小笠原を例に～

九州支所 森林生態系研究グループ 主任研究員 安部 哲人

現在、地球規模で生物多様性の劣化が急速に進んでおり、人類はこれを阻止するという目標を達成できずにいます。これまで演者は生物多様性のホットスポットとされる小笠原諸島と阿蘇で絶滅危惧種の保全や外来種駆除に関する研究をしてきました。本講演ではそれぞれでの研究を例に生物多様性をどう維持すべきかという問題について考えたいと思います。

小笠原諸島は独自に進化した固有種が数多く生息する海洋島で、世界自然遺産の候補地にもなっています。ところが、生息地破壊や外来種問題が進行し、固有の生態系は危機的な状況にあります。現在、さまざまな対策が講じられており、そのいくつかを紹介します。

阿蘇は人が管理する草原生態系で多様性が維持されてきた特殊な地域です。全国的に草原が減少する中で、阿蘇は多くの草原性絶滅危惧植物の有力な自生地となっていますが、安泰な状況とはいえません。本講演ではハナシノブの研究を中心に、草原性絶滅危惧種の現状と課題について紹介します。



開催日時 平成 22年 11月 15日(月) 13:30~16:30

場 所 くまもと県民交流館パレア
熊本市手取本町8-9 鶴屋東館10階パレアホール

■問い合わせ先／ 独立行政法人
森林総合研究所 九州支所
熊本市黒髪4-11-16 TEL 096(343)3169
<http://www.ffpri-kys.affrc.go.jp/>